

---

# まどろみの国の物語

一理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まどろみの国の物語

### 【Nコード】

N5065BA

### 【作者名】

一理

### 【あらすじ】

まどろみの国 夢と現実の狭間に存在する不思議な国で、それぞれに深かったり浅かったりの物語が存在する。

司は複雑怪奇で意味不明の物語を見ていきながらふと淡い恋心に気がつくが、関係ないやつに邪魔されていく。

## 1、プロローグ

チャイムの音は甲高い。

扉を開け閉めする動作音はうるさい。

騒がしい生徒の声は先生の一喝で静まり返る。一瞬だけ。

始まった授業は退屈な数学の授業で、黒板に書きだされていく数字は何の意味をもつのか私にはわからない。教科書を立ててこっそりお菓子を食うやつも、机の下を不自然に覗き込みながら携帯をつくやつも、興味ない。

あくびを一つもらすと、紙屑が飛んできた。

「・・・・・・・・」

ゴミこつちに捨ててクンなし

先頭の片隅の席だったのでちょうど斜め前にあるゴミ箱めがけ投げ捨てる。

「ねむ」

もう一回あくびをする。

ころん、とまたゴミ屑が

「・・・・・・・・」

だれやねん。

振り返ると森馬一人数だった。ちなみに最初なんていう名前か読めなかったが、もりうま　ひとかずっていうらしい。

「ちっ」

舌打ちして睨むと『頼む』のポーズでこちらに何かを求めている。

「えーと、今日はこの一列前に出て書け」

ああ、今日あたる日だったのか、ざまあ

「頼むよ、あとでなんかおこるからさ」

「コンビニでエロ本」

「は!？」

「嘘だよ」

先生が早くしろつと急かす。

「頼むよ」

「仕方ないな」

黒板に書かれた問題をみる。

む、さっぱりわからん。

「答えは？」

「先生森馬が答えを聞いてきます」

「森馬あ」

「おまつ裏切り者！！」

どうでもいいけど、自分で解け。

休み時間、お弁当の時間。一人机の上に弁当を広げると横からすごい勢いで机をぶつけられた。睨むように見れば一年の時のみならず中高が同じという同じクラスの腐れ縁。伏見馨だった。

「何？」

「いやん夢野ちゃん怖い顔、一緒に食べよん」

馨は男だが女のような顔のつくりなので本人もたまに女のようにふるまうことがある、友達も男より女のほうが多いし。

「苗字で呼ぶな」

「かわいいのに、夢ちゃん」

「・・・」

「冗談怒らないで司」

男のくせに肩まである髪の毛をリボンでくくって束ねているところを見ると、先生の髪の毛切れという注意をまた無視するらしい。

つかリボンって。

弁当を食べ終え机に伏す。

「寝るの？眠り姫のようによく眠るね。王子様のキスはいかが？」

「しばくぞ」

「馨ちゃん、司く相変わらず仲いいね」

「優衣もか、私の眠りを覚ますものは何人たりとも許さぬ」

「いつからファラオになったの？」

優衣はどこからか椅子を引っ張ってきて司の前に座った。  
寝たいんだけど。

「ね、そんなに寝てんならさ『まどろみの国』はみたことある？」

「まどろみ？」

「そう。よくわかんないんだけど、夢と現実の間にその国があってそこに行くお願いがかなうんだってさ」

「へえ。お休み」

「聞けよ」

うるさいな。

「司！お前よくもさっきの数学の時間」

「それ焼きそばパン？一口くれ」

「伏見の一口は一口じゃねーからいやだ」

「じゃあ私に頂戴」

うるさい頭上も無視して、眠る。

体が浮遊する感覚。

暗闇のはずの視界の隅から白い丸い何かがびよこびよこはねてやってきた。それはデフォルト化された羊でかわいらしく二足で立っていた。

サッと看板を見せた。

「.....」

下？

下を見た瞬間私は、落ちた。

## 2、まどろみのなか

お茶をすすっているのと遠くから砂埃がやってきているのが見えた。木の上で子どもはお茶をすすっている男がまたぶつ飛ぶものだと思っていたが、白い何かが高速で移動しきったところには男はすでに回避し新しく急須にお湯を入れようとしていた。

「あ」

ぐしょ、男は上から降ってきた何かによつてつぶされた。

珍しいこともあるもんだとおもっていたが、そうでもなかったようだ。

「おい、これなんだ」

「これじゃなくて、こいつのがいいんだけど」

司は起き上がった。

学校で寝ていたら、なぜか外に出ている。

周りは真っ白でただ広く、大きな木が一本だけあった。

夢か、夢なのか。そうなのか。

「自分が踏んでいるものを見る」

王様コスプレしたKidがそういうので、下を見れば誰か踏んでいることに気が付いた。のんびりのくと男が立ち上がった。

「うわ」

思わず声がでた。

包帯ぐるぐるで肌が一切見えない。ミイラ男だった。

「なんで着てる服学ランなの」

「おや、突っ込むのはそこですか」

しかも雰囲気が今の学ランではなく明治とかに来ていた服の学ランだ。

「いや、そこは触れちゃいけない何かかなって」

「豪胆ですねえ、結構結構。気にしませんが私がなぜ包帯まみれ

かといいますと」

すっこーん。

目の前で話していたはずの男が消えた。

「……………」

子供と一緒に傍観する。

ひゅうつと弧を描くとぐしゃつと着地した。

「生きてる？」

「いつものことだ。気にしないでいいよ」

子どもはそういつて大きすぎるマントを引きずって椅子に座った。

「てかさ、ここどこ。夢か、こんなリアルすぎる夢どう対処したらいいのか」

「そう、ここは夢と現実のはざまに存在するまどろみの国」

「うわ、血まみれですけど」

なんでこの人が包帯まみれなのかわかった気がする。

「まどろみの国？」

夢がかなうとかどういえば優衣が言ってたな。ああ、なるほど

「優衣が変なこと言うから暗示的なものにかかって夢に深く出てきたんだ」

「おい、包帯。なんか夢扱いだぞ」

「夢じゃないんですけどね、現実でもないのですが」

「……………」

包帯男は紳士的な動作で司の手をつかむと、軽く握った。

とたん、周りの真っ白な空間からカラフルな色が通り過ぎていき、白と黒と灰色の光のたまが集まってきた。それは広がり森になった。

彼は司の手をつかんだまま歩き出す。

「夢を見ていればあなたはまどろみの国の住民。でも起きているあなたは大事なお客様だ」

なんでだろう、優しい声でそう言われたから、ドキッと心臓がはねた。

「あのさ、どこいってんの」

「まどろみの国の紹介をば」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5065ba/>

---

まどろみの国の物語

2012年1月14日21時56分発行